フレグ家の通婚関係にみられる交換婚

宇　野　　伸　浩

はじめに
1．ギブ・アンド・テイクの交換婚の特徴
2．フレグ家とオイラト族テンギズ家との交換婚
3．交換婚の政治的背景
結論

はじめに

筆者はこれまでに、チンギス・カンからモンケ・カアンまでのチンギス・カン家の通婚関係、およびクビライ・カアン以降の元朝皇帝の通婚関係について分析し、チンギス・カン家と最も通婚関係の密接なコンギラト族アルチ・ノヤン家、オイラト族クドカ・ベキ家との通婚関係が、ギブ・アンド・テイクのパターンをもつ互酬的な縁組みシステムに基づいていることを明らかにした。この研究成果は、すでに2本の論文にまとめて発表した[1]。しかし、これら論文では、フレグ家については十分に論じることができなかった。フレグとその息子ジュムクルについて、オイラト族のクドカ・ベキ家とギブ・アンド・テイクの通婚関係があることを論証したが、アバガ以降のフレグ家の通婚関係については言及しなかった。それは、フレグ家の通婚関係に独自の特徴があり、当時はそれを十分に論ずるだけの用意がなかったからである。今回、あらためてフレグ家の通婚関係を取り上げ、その特徴を明らかにしてみたい。

当初筆者は、イルカン国においては、ギブ・アンド・テイクの縁組みシステムが機能していなかったのではないかと考えていた。なぜなら、イルカンの母方の血筋を見てみると、コンギラト族、オイラト族などの名門姻族が重んじられていないように見えるからである。例えば、第2代アバガ・カンの母イスンジン・カトンは、スルドス族出身であり、第4代アルグン・カンの母カイミシ・エゲチは出身部族不明の側室であり、第6代ガザン・カンの母クルタク・エゲチはドルベン族出身の側室であり、いずれもオイラト族やコンギラト族などの名門姻族出身ではない。そのため、一見、フレグ家では名門姻族との姻戚関係が軽視されていたように見える。イルカン国のイルカン位継承は、フレグ－アバガ－アルグン－ガザンの直系ラインが支柱になっており、その直系ラインにおいて、このように繰り

返し母方の血筋が名門姻族と関係ないのであるならば、チンギス・カン以来の縁組みシステムは機能していないような印象を受けるのである。

ところが、『集史』などの史料から婚姻の事例を抽出し、通婚のパターンを詳細に分析した結果、名門姻族が軽視されていたのではないことがわかった。フレグ家とオイラト族との間では、連続的なギブ・アンド・テイクの通婚パターンが一度途切れるが、その後ギブ・アンド・テイクの交換のパターンに基づいた交換婚が新たにスタートしていた。なぜ一度途切れた通婚パターンが再開したのか、イルカンが名門姻族とどのような関係を維持していたかについて、その背後にある政治状況を含めて本稿で論じてみたい。

イルカン国の姻戚関係については、志茂碩敏氏の詳細な研究がある[2]。また、イルカン国のカトンについては、ラムトンの若干の分析がある[3]。本稿では、ギブ・アンド・テイクの通婚パターンの抽出という独自の方法でイルカン家の通婚関係の分析を行うことにより、新たな事実を解明してみたい。

1．ギブ・アンド・テイクの交換婚の特徴

まず、これまでに筆者が発表した論文[4]において明らかにしたチンギス・カン家に見られる縁組システムについて説明しておきたい。

チンギス・カン家と名門姻族との間に見られる縁組みシステムは、図1のように、「ある男性が妻を娶ったお返しに、自分の娘を妻の兄弟の息子に嫁がせる」というギブ・アンド・テイクの交換婚である。チンギス・カン家だけでなく、相手の姻族も同じルールにそってギブ・アンド・テイクの交換婚を行うことにより、世代を超えて姻戚関係が形成され続ける。

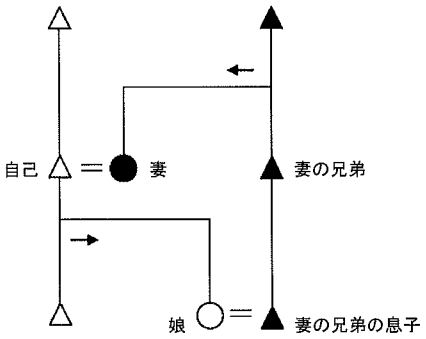

図1　チンギス・カン家の交換婚の基本パターン

このように同一の家系と女性を交換し合う（妻を娶り、娘を嫁がせる）ことにより2重の姻戚関係が形成されるが、さらに理想的に機能した場合は、それに母方の親族関係が加わり、3重の姻戚・親族関係が同一の家系との間に形成される。ただし、母方の親族関係によって二つの家系が集団として結び付けられるためには条件があり、婚入してきた女性から生まれた息子が、父の跡を継いでその家系を代表する当主となることが必要である。その条件が満たされた場合、二つの家系は、集団として母方の親族関係によって結ばれ、その関係を世代を超えて持続することができる。

例えば、図2で言えば、チンギス・カンの娘チチェゲンがクドカ・ベキ家のトレルチに嫁いだことにより、二人から生まれたブカ・テムルにとってチンギス・カンは母方の祖父となる。さらに、トレルチとチチェゲンから生まれた娘クイクがフレグに嫁ぐことにより、

二人から生まれたジュムクルにとって、今度はトレルチが母方の祖父になる。このように交互に相手の母方の親族になりながら、世代を超えて一定の母方の親族関係が、二つの家系の間で維持される。

この母方の親族関係が二つの家系を集団として結びつける絆として機能するためには、婚入してきた女性から生まれた息子が父の跡を継いで当主になること、すなわちブカ・テムルがトレルチの跡を継ぎ、ジュムクルがフレグの跡を継ぐことが必要である。従って、当主の跡を継ぐ者の母方の血筋が重要であることがわかる。もし、婚入してきた女性から生まれた息子が当主の跡を継がないならば、息子の世代では、母方の親族関係は形成されても、両家を集団として結びつける絆としては機能しないことになる。

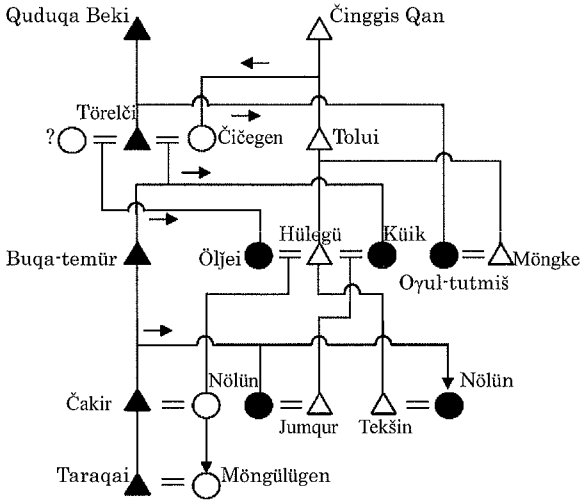

図２　チンギス・カン家とクドカ・ベキ家の通婚関係
（↓はレヴィレート婚を示す）

２．フレグ家とオイラト族テンギズ家との交換婚

フレグ家では、図２のように、チンギス・カンからフレグの次子ジュムクルまで連続していた名門姻族オイラト族クドカ・ベキ家との連続的な交換婚が途絶えてしまった。しかし、フレグの時代に、オイラト族テンギズ家との間に新たな交換婚がスタートしたのである。同じオイラト族の中で新たな姻族が登場し、姻族の交代が起きたのは、ジュムクルが死去し、結果的にアバガがイルカンに即位したことと密接な関係がある。

まず、テンギズ家との間でどのような交換婚が生じたかを述べ、その上で、その背景となった政治的文脈を明らかにしたい。なお、フレグ家とテンギズ家との婚姻の事例については、志茂氏がすでに史料から網羅的に抽出している。併せて参照していただきたい[5]。

(1) 通婚関係の始まり

テンギズは、史料１によると、クドカ・ベキ家と父方の親族関係があったというが、詳しい関係は不明である。テンギズは、史料１に述べられているように、はじめオゴデイの息子グユクの娘を娶って、オゴデイ家と姻戚関係を持っていた。そのため、トルイ家がオゴデイ家との帝位継承争いに勝ち、1251年にトルイ家のモンケが即位したとき、テンギズは杖刑に処されたが、彼が娶ったグユクの娘の懇願により助命された。

(史料1) オイラトの部族長であるクドカ・ベキと親類関係にあるアミールたちやグレゲンたちの中の一人は、テンギズ・グレゲン (Tenggiz güregen < Tenkkīz kūrkān) である。グユク・カンは彼に娘を与え、彼は婿となった。グユク・カンが死去しモンケ・カンが王位に即いたとき、グユク・カンの一族と何人かのアミールが反逆を謀り、アミールたちが処刑された。そのとき、テンギズ・グレゲンも告訴され、彼の両腿の肉がそげ落ちるほど棒で打たれた。その後、彼のカトンであったその娘が彼の助命を請い、彼を彼女に授けた。 『集史』部族編 (Rašīd/Али-заде 1–1: p. 227)

それとの前後関係は不明であるが、史料2によれば、テンギズの娘アリカン・エゲチは、フレグの側室となり、フレグが西アジア遠征に出発したときには、モンゴルに残され、コンギラト族出身のフレグの第一カトンであったクトイ・カトンの宮廷を委ねられた[6]。

(史料2) (フレグの) 第8番目の息子アジャイ。彼の母親は側室であり、名前をアリカン・エゲチ (Ariqan Egeči < Arīqān Īkājī) といってテンギズ・グレゲンの娘であり、クトイ・カトンのオルドにいた。フレグ・カンがイランの地に来るとき、彼女をクトイ・カトンのオルドの長に定めた。 (Rašīd/Али-заде 3: p. 11)

以上は、テンギズがモンゴル高原にいた時代に、テンギズ家とチンギス・カン家との間に生じた最初の姻戚関係である。この二組の婚姻を図示すると図3のようになり (トゥドゥゲチの婚姻については後述)、ギブ・アンド・テイクではあるが、図1のような典型的なギブ・アンド・テイクのパターンにはなっていない。また、当時テンギズ家は、同じオイラト族のクドカ・ベキ家と比べれば、姻族としてははるかに小さい存在でしかなかった。

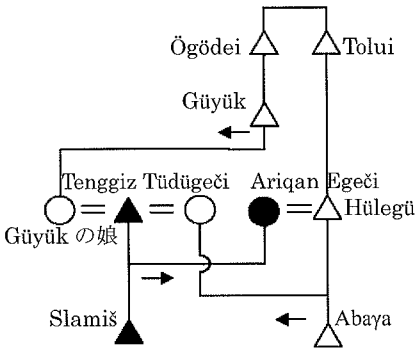

図3 フレグ家とテンギズ家の通婚関係 (1)

(2) フレグ家におけるテンギズ家との交換婚の展開

ところが、フレグとともにイランに来たテンギズは、イルカン国で、フレグ家の重要な姻族となったのである。まず、史料3によると、テンギズ自身がフレグの娘のトゥドゥゲチを娶った。

(史料3) (フレグの) 4番目の娘トゥドゥゲチ (Tüdügeči < Tūdūkāj)。彼女の母親はドクズ・カトンのオルドの側室であり、彼女の名前は...。彼女をオイラト族出身の

テンギズ・グレゲンに与えた。彼は以前にグユク・カンの娘を娶り、彼女の名前は...である。テンギズ・グレゲンが死去したとき、彼の息子のスラミシが彼女を娶った。現在、テンギズの孫のチチェク・グレゲンが彼女を娶っている。

『集史』フレグ・カン紀（Rašīd/Али-заде 3: p. 16）

フレグがドクズ・カトンを娶ったのはイランに来る途中であったので、そのオルドにいた側室の娘のトゥドゥゲチをテンギズが娶ったのは、フレグとテンギズがイランに来た後のことである。この婚姻によって、フレグとテンギズは、図3のように互いに娘を嫁がせ合うタイプの交換婚を行った。チンギス家の姻戚関係全体の中で、互いに姉妹を嫁がせ合う姉妹交換婚の例はいくつかあるが、娘をたがいに嫁がせる交換婚は珍しいタイプである。

そして、次の史料4に述べられているように、テンギズの娘のクトルグがフレグの孫のアルグンに嫁いだ。

（史料4）アルグン・カンは、アバガ・カンの最年長の息子であり、カイミシ・エゲチから生まれた。彼にはカトンたちと側室たちがいた。その全ての中で最も上でありテンギズ・グレゲンの娘であるクトルグ・カトンを娶った。彼女が亡くなったとき、スラミシの娘であり（クトルグの）姪のオルジタイを求めた。彼女の母親はトゥドゥゲチである。彼女はまだ子供であったので、彼と夫婦にはならなかった。

『集史』アルグン・カン紀（Rašīd/Али-заде 3: p. 196）

以上の二組の婚姻（テンギズとトゥドゥゲチの婚姻、アルグンとクトルグの婚姻）を図示すると図4のようになり、図1のギブ・アンド・テイクのパターンにそった交換婚であることがわかる。ただし、テンギズの娘クトルグは、トゥドゥゲチの娘ではなく、上述のグユクの娘とテンギズの間に生まれた娘であった[7]。

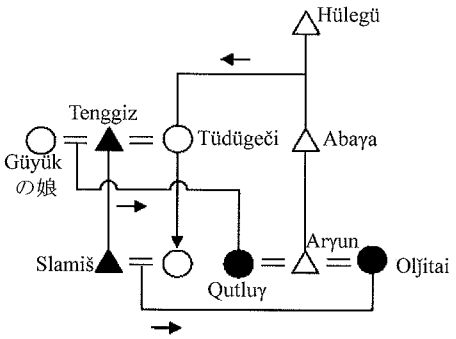

図4　フレグ家とテンギズ家の通婚関係（2）

(3) 交換婚の展開

では、この交換婚は、アルグンとクトルグの婚姻以後、どのように連続したのであろうか。

まず、テンギズの妻トゥドゥゲチは、前掲の史料3、史料4によると、図4のように、テンギズの死後、レヴィレート婚により、テンギズの息子スラミシに嫁ぎ、スラミシとトゥドゥゲチの間に娘オルジタイが生まれた。一方、アルグンに嫁いだクトルグが、次の史料5のように1288年に死去すると、史料4に述べられているように、アルグンはそのオルジ

タイを娶った。

（史料5）その年（イスラム暦687年）のサファル月の7日に（1288年3月13日）、オイラト族出身のテンギズ・グレゲンの娘で、王子カタイ・オグルの母親であるクトルグ・カトンが死去した。　『集史』アルグン・カン紀（Rašīd/Али-заде 3: p. 207）

オルジタイはクトルグの姪（兄弟の娘）にあたるので、アルグンが、妻クトルグの死後、妻の姪オルジタイを娶ったという点からすれば、これはソロレート婚であるといえる（図4参照）。また、これを交換のパターンとしてみれば、図5のように、スラミシが妻トゥドゥゲチを娶ったお返しとして、妻の兄弟アバガの息子アルグンに、娘のオルジタイを嫁がせたことになり、ギブ・アンド・テイクのパターンにそった交換婚になっている。従って、左右対称に連続した交換婚ではないが、交換のパターンは維持されていたことがわかる。

さらにその後、スラミシが死去すると、もう一度レヴィレート婚を行い、トゥドゥゲチはスラミシの息子チチェグに嫁いだ。チチェグとトゥドゥゲチから生まれたのが、史料6に述べられているように、ハジであり、ハジはアルグンの息子オルジェイトゥに嫁いだ（図6参照）。

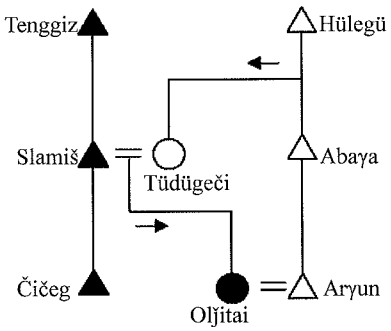

図5　フレグ家とテンギズ家の通婚関係(3)

（史料6）（オルジェイトゥ・カンの）第4番目のカトンは、ハジ・カトンであり、フレグ・カンの娘である母親トゥドゥゲチから生まれた。彼女は、テンギズ・グレゲンの息子チチェグの娘であり、彼女からアブー・サイードという名の皇帝になった好運な息子がいた。

『オルジェイトゥ史』（Qāšānī/Hamblī: p. 7）

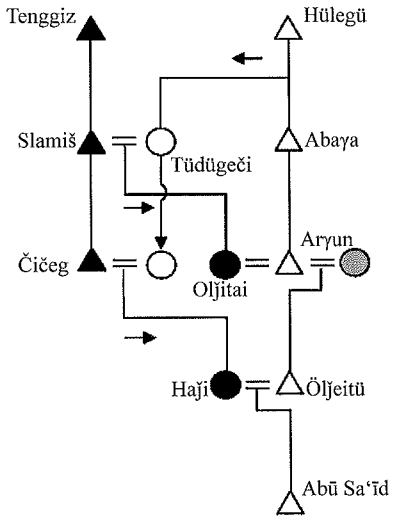

図6　フレグ家とテンギズ家の通婚関係(4)

この婚姻も、チチェグが妻トゥドゥゲチのお返しとして娘ハジを妻の一族に嫁がせたという点では、ギブ・アンド・テイクの交換婚になっているが、チチェグが、妻の兄弟アバガの息子にではなく、妻の兄弟アバガの孫オルジェイトゥにハジを嫁が

せたという点では、典型的なタイプより一世代ずれていることがわかる（図７）。

このように、フレグ家とテンギズ家との間で生じた新たな姻戚関係はギブ・アンド・テイクのパターンにそった交換婚になっていた。従って、イルカン国のフレグ家においても、チンギス家の通婚関係に特有のギブ・アンド・テイクの縁組システムが機能していたことがわかる。ただ、クドカ・ベキ家との交換婚がおよそ左右対称に連続していたのに対し、テンギズ家との交換婚はレヴィレート婚を挟んで著しく左右アンバランスになっていた。

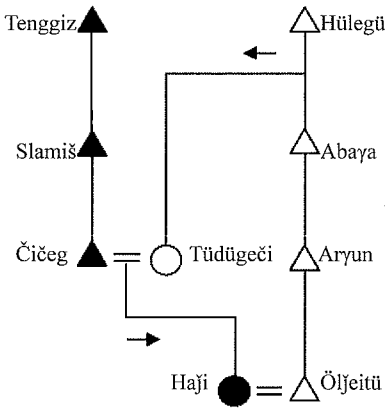

図７　フレグ家とテンギズ家の通婚関係(5)

では、フレグ家が、オイラト族テンギズ家との間に交換婚を展開・継続したにもかかわらず、イルカンの母方の血筋が名門姻族と関係が薄かったのはなぜであろうか。この点について、次章でイルカン位継承をめぐる政治的背景と関連づけながら論じてみたい。

３．交換婚の政治的背景

(1) 第２代アバガ・カンの即位―アバガ・カンの母方の血筋

フレグの長子アバガは、1265年にイルカン国の第２代イルカンとして即位した。このアバガの即位に関してまず検討すべき点は、なぜ、フレグの次子ではあるが嫡長子（第一カトンの長子）であるジュムクルが、第２代イルカンにならなかったかという点である。ジュムクルは、フレグの最初の第一カトンであるクイク・カトンの一番上の息子であり、クイク・カトンは図２のように、名門姻族オイラト族クドカ・ベキ家の出身であった。従って、ジュムクルはフレグの後継者として申し分のない条件がそろっていた。実際、次の史料７に述べられているように、フレグが、イランに出発する前に後継者候補として選んだのはジュムクルであった。

（史料７）（フレグは）ジュムクル王子を、母親が他のカトンたちより上であったので、自分の後継者として、オルドと軍隊の上に定めた。息子たちの中から、年上のアバガとヨシュムトを自分の連れとして指名した。

『世界征服者の歴史』（Juwaynī/Qazwīnī: pp. 96–97）

しかし、従来の研究では、フレグの死後、アバガがイルカン位を継承したのは、アバガが長子であったからだと考えられており、この点について疑問がもたれたことはあまりなかった。確かに『集史』には、

（史料8）フレグ・カンが死去したとき、彼らの慣例に従って、諸道を閉鎖した。いかなる者も移動してはならないというヤサが発せられた。すぐに使者がアバガ・カンのもとへ、ホラーサーン方面へ派遣された。なぜなら、彼が年長であり後継者であったからである。また官職にあってアバガ・カンに仕えていたアルグン・アカも召喚された。アバガ・カンは、そのときマーザンダラーンの冬営地にいた。ユシュムトは、彼に属していたデルベンドとアラーンの領地にいたが、父親の死後8日後に（フレグのオルドに）到着した。　『集史』アバガ・カン紀（Rašīd/Али-заде 3: p. 101）

とあり、アバガが「年長」であること、すなわち長子であることが後継者となった正当な理由であるかのように書かれている。さらに、次の史料9によれば、フレグがアバガを後継者とするという遺言を残していたのであり、それをセクトル・ノヤンらが証言したことによって、アバガの即位が決定した。

（史料9）哀悼の儀式を挙行した後、すべてのカトンたち、王子たち、駙馬たち、アミールたちが集まり、彼（アバガ）の即位について相談した。そのとき、昔からの大アミールたちが出席していた。たとえばイルカ・ノヤン、スンジャク・ノヤン、スンタイ・ノヤン、サマガル・ノヤン、セクトル・ノヤン、アルグン・アカ。その他の者は冗長になるので省略する。その中から、イルカン（フレグ）が遺言を与え、ビリクを委ねていたセクトル・ノヤン、およびスンジャク・アカが、その他のアミールたちの前で、後継者はアバガ・カンであると証言した。

『集史』アバガ・カン紀（Rašīd/Али-заде 3: pp. 100–101）

アバガの死後に第3代イルカンとして即位したのは、アバガの弟テグデルである。その後、イルカン国では、このように兄が先に即位しその後に弟がイルカンの地位を継承するというパターンが繰り返された。すなわち、アバガの長子アルグンが即位した後にアルグンの弟ガイハトゥがその地位を継承し、アルグンの長子ガザンが即位した後にガザンの弟オルジェイトゥがその地位を継承した。従って、長子には、弟より先に即位する正当性が認められていたかのように見える。

しかし、モンゴル帝国におけるチンギス・カン以来の帝位継承からみると奇異であるのは、アバガ、アルグン、ガザンの母親たちはみな第一カトンではなく、血筋が他の弟たちの母親に比べて劣り、地位が低いことである。アバガの母イスンジンは、スルドス族出身の側室であり、もともとオイラト族出身の第一カトンのクイク・カトンのオルドにいた。彼女は、のちにカトンとなったが、第一カトンではなかった。また、アルグンの母カイミシ・エゲチは、出身部族不明であり、側室であった。ガザンの母クルタク・エゲチはドルベン族出身であり、側室であった。

それに対して、チンギス・カン以来、モンゴル帝国の帝位継承は、常に第一カトンの息子たちの間で争われてきた。まず、チンギス・カンの第一カトンのボルテの息子たち（ジョチ、チャガタイ、オゴデイ、トルイ）および彼らの子孫の範囲内で帝位が争われ、次にオゴデイ家からトルイ家へ帝位が移った後は、トルイの第一カトンのソルカクタニ・ベキの息子たち（モンケ、クビライ、フレグ、アリク・ブケ）の範囲内で帝位が争われた。元朝成立以後も、クビライの第一カトンのチャブイの息子たち（ドルジ、チンキム、マンガラ、ノムガン）の範囲内で帝位が争われた。従って、モンゴル帝国の帝位継承者は、ほとんどの場合、第一カトンの息子であり[8]、母親の血筋によって後継者候補の範囲が絞られていたと考えられる。

イルカン位の継承が、この原則から大きくはずれているのはなぜであろうか。しかし、フレグの後継者の場合、はじめから母親の血筋が問われなかったのではない。1253年にフレグが西アジア遠征に出発したとき、フレグは次子のジュムクルに自分の後継者としてモンゴル高原のユルトを委ね、長子アバガと第三子ヨシュムトを連れて、イランへ向かった。このとき、次子ジュムクルを自分の後継者とみなした理由は、前掲の史料７に明確に述べられているように、ジュムクルの母親が「他のカトンより上であった」から、すなわち第一カトンであったからである。

ジュムクルの母クイク・カトンは、名門姻族のオイラト族クドカ・ベキ家の出身であった。一方、長子アバガの母イスンジン・カトンは、次の史料10に「クイク・カトンのオルドから娶った」とあることから分かるように、もともとクイク・カトンのオルドにいた側室であり、スルドス族出身であったので、血筋の点ではクイク・カトンの方が明らかに上であった。

（史料10）もう一人のカトンのイスンジン・カトンはスルドス族の出身であり、彼女もモンゴル地方でクイク・カトンのオルドから娶った。彼女は、クトクイ（正しくはクトイ）とともにモンゴルの地に残っていたが、その後こちらへ来た。

『集史』フレグ・カン紀（Rašīd/Али-заде 3: p. 8）

従って、1253年の時点では、フレグは、自分の後継者候補の条件として、長子であることよりも、母親が第一カトンであることを重視していたのである。

次に、このジュムクルは、フレグが死去した1265年２月８日の前年の1264年まで生きていたことを確認しておきたい。まず、次の史料11によると、ジュムクルは、クビライとアリク・ブケの帝位継承争いに巻き込まれ、アリク・ブケ側について戦っていたが、アリク・ブケ側が敗北して、アリク・ブケがクビライに投降するためにクビライのもとへ向かったとき、ジュムクルは病気のため離脱した。

(史料11) アバガ・カンはホラーサーンへ向かい、セラフスまで来ると、冬はマーザンダラーンとその周辺で冬営した。フレグ・カンのアウルクが到着したという知らせが届くと、彼は彼らを出迎えた。カブード・ジャーメの周辺に、クトイ・カトンが、二人の息子テクシンとテグデル、ジュムクルの息子ジュシュカーブとキンクシュ、タルカイの息子バイドゥ、アバガ・カンの母親のイスンジン・カトンとともに到着した。彼らの話は次の如くである。フレグ・カンがイラン国へ出発したとき、自分のアウルクをモンケ・カアンのもとに残した。アリク・ブケの乱の時、ジュムクルは彼の仲間であった。(アリク・ブケが) アルグとの戦いに敗れ、(クビライ・) カアンのもとへ向かったとき、ジュムクルは、病気と治療を理由にして後に残り、その地方に留まった。この知らせがフレグ・カンに届くと、662年 (1263. 11. 4–1264. 10. 23) にアバタイ・ノヤンをジュムクルとアウルクを呼び寄せるために派遣した。ジュムクルは病気であったため、途中で死去した。アバタイ・ノヤンは、彼らをサマルカンドの周辺に残してフレグ・カンのもとへ帰った。状況を申し上げると、アバガ・カンは彼を有罪であるとして80回の杖刑に処し、「彼をよく警護せず、また飲食物への権力の行使、カトンたちへの監督の点で行き過ぎていた」と仰せになった。

結局、上述の時に、あるインド人が彼らを案内し、ある道からうまく彼らを脱出させ、アム河を渡らせ、666年ジュマーダー・アルウーラー月の19日 (1268年2月7日) にカブード・ジャーメの周辺で、アバガ・カンのもとへ到着した。アバガ・カンは彼を慰撫し、タルカンにした。クトイ・カトンは、フレグ・カンが死んだという知らせをバダクシャンの周辺で聞き、目が見えなくなるほどひどく泣いた。アバガ・カンは彼らの到着を喜び、彼らの到着を称え、多くの財宝を与えた。

『集史』アバガ・カン紀 (Rašīd/Али-заде 3: pp. 105–106)

ジュムクルがアリク・ブケから離れた時期は、次の史料12から、1264年であることがわかる。

(史料12) フレグ・カンの息子のジュムクルは、突然軽い病気にかかると、治療のためにサマルカンド方面へ行くという理由で、アリク・ブケに暇乞いを求めた。662年のラビー・アルアッワル月 (1264年1月) が年頭にあたる qūlqīna yīl すなわちネズミ年に、彼 (アリク・ブケ) から別れた。

『集史』クビライ・カン紀 (Rašīd/Topkapı 1518: fol. 202a)

ジュムクルがアリク・ブケから離れたことを知ったフレグは、史料11に述べられているように、使者アバタイ・ノヤンを派遣してジュムクルを呼び寄せようとしたが、結局、ジュムクルは病死した。アバタイ・ノヤンは、ジュムクルが連れていたカトンや他の王子たち

を残してフレグのもとへ帰り、フレグにジュムクルの死去を報告した。

このように、フレグが死去する前年まで、フレグが最初に後継者とみなしたジュムクルは生きており、フレグは彼を呼び寄せようと努力していたのである。一方、『集史』の中で、アバガをフレグの後継者候補として記している箇所（史料８、史料９）は、あくまでジュムクルが死去した後の記事である。従って、アバガは、長子であったという理由だけで、ただちにフレグの後継者候補であったわけではなく、最初の後継者候補のジュムクルが死去したことによって、初めて後継者候補になりえたのである。

なお、『集史』は、アバガの孫のガザンとオルジェイトゥの治世に編纂されたものであるので、アバガの即位の正当化に有利な事実は積極的に記しているが、ジュムクルが最初後継者候補であったというアバガにとって不利な事実は、あえて記さなかったということは、『集史』の史料的な性格からして、十分に考えられることである。

ところで、フレグの第一カトンの地位は、クイク・カトンが早く死去した後、次の史料13に述べられているように、コンギラト族出身のクトイ・カトンに引き継がれた。

（史料13）もう一人のカトンのクトイ・カトン（Qutui Qatun < Qūtūī Ḫātūn）は、コンギラト族の王の骨（血筋）出身の---- の娘である。クイク・カトンがモンゴル地方で亡くなったとき、彼女を娶り、彼女（クイク・カトン）の牧地（yūrt）を彼女（クトイ・カトン）に授けた。　　『集史』フレグ・カン紀（Rašīd/Али-заде 3, p. 8）

フレグ家とコンギラト族の姻戚関係については、史料から網羅的に婚姻例を抽出した志茂氏の研究があり[9]、それにもとづきフレグ家とコンギラト族のムサ・グレゲン一族との通婚関係を系図にしたものが図８である。この通婚関係にもギブ・アンド・テイクの交換婚のパターンがあることが確認できる。フレグは、モンゴル高原にいた時代に一時期コンギラト族との姻戚関係を重視し、オイラト族の第一カトンが亡くなった後、コンギラト族出身のムサの姉妹クトイを娶って第一カトンの地位につけ、自分の五女のタラカイをムサに嫁がせた。しかし、フレグが西アジア遠征に出発する頃には、再度オイラト族との姻戚関係を重視する方針に転換したようであり[10]、上述のように、後継者としてモンゴルの初封地に残されたのはオイラト族出身の母から生まれたジュムクルであった。

クトイ・カトンからは、テクシン、テグデルの二人の息子が生まれた。フ

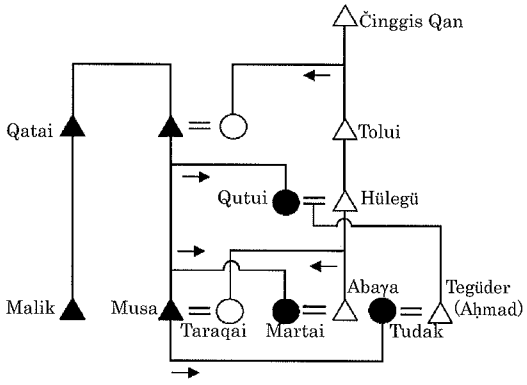

図８　フレグ家とコンギラト族の通婚関係

レグは、このクトイ・カトンを二人の息子と共にモンゴルに残してイランへ向かった。フレグは、イランへ向かう途中で、新しい第一カトンとして、ケレイト族出身のドクズ・カトンを娶ったが、ドクズ・カトンからは男子は生まれなかった。

ジュムクルが死去した時点で、フレグの後継者として、アバガ以外に、フレグの二代目の第一カトンであるクトイ・カトンから生まれたテクシン、テグデルも候補に考えられていた可能性が十分ありうると思われる。しかし、実際には後継者にならなかった。おそらく、この二人はジュムクルとともにイランに向かったが、フレグが死去したとき、まだイランに到着していなかったことが、理由の一つであろう。

また、もう一つの理由として、フレグがコンギラト族との姻戚関係を軽視するように変わったことが考えられる。フレグが西アジア遠征に出発した1253年には、2年前に即位したモンケ・カアンがオイラト族支持に変わっていたため、コンギラト族は姻族としての勢力を失いつつあった。フレグもコンギラト族との姻戚関係を軽視し、前述のように、コンギラト族出身のクトイ・カトンのオルドをオイラト族の出身の側室アリカン・エゲチに委ねてしまった。以後、フレグはオイラト族テンギズ家との関係を強めたので、コンギラト族の血を引くクトイ・カトンの息子たちを自分の後継者とすることを望まなかったという可能性が考えられる。

(2) アバガと名門姻族との関係

上述したような経緯を経て、アバガは元来フレグの後継者候補ではなかったが、結果的には1265年に31歳で第2代イルカンとなった。

フレグ家にとって名門姻族とは、チンギス・カン、トルイ、フレグの第一カトンの出身部族である。すなわち、コンギラト族(ボルテ、クトイの出身部族)、ケレイト族(ソルカクタニ・ベキ、ドクズの出身部族)、オイラト族(クイクの出身部族)の3部族が最も有力な姻族である。歴代イルカンは、この3部族と何らかの形で姻戚関係を持っていた。

アバガも、この3部族出身のカトンを娶った。ケレイト族からはトクタニ・カトン、オイラト族からはオルジェイ・カトンを娶った。次の史料14に述べられているように、この二人のカトンを娶ったのは、父フレグの死後に父の寡婦を娶るレヴィレート婚によってであった。ただし、この二人は第一カトンにはならなかった。

> (史料14) アバガ・カンはフレグ・カンの死後、オルジェイ・カトンを娶った。また、フレグ・カンの側室であったトクタイ(正しくはトクタニ)・カトンを自分に娶り、彼女はドクズ・カトンの代わりにブクタクを頭に被り、カトンになった。
>
> 『集史』アバガ・カン紀(Rašīd/Али-заде 3: p. 96)

アバガは、コンギラト族からは、次の史料15に述べられているように、マルタイ・カトン

を娶った。図８から分かるように、この婚姻はギブ・アンド・テイクの交換婚のパターンにそった婚姻であったが、彼女も第一カトンではなかった。史料15によれば、バヤウト族出身の大ブルガン・カトンの方が彼女より地位が上であったので、マルタイ・カトンはあまり重視されていなかったらしい。

（史料15）（アバガ・カンは）その次に、コンギラト族出身のマルタイ・カトンを娶った。彼女はチンギス・カンの娘の息子であるムサ・グレゲンの姉妹であり、ムサの母はクトイ・カトンの母でもあった。彼らは従兄弟だった[11]。マルタイ・カトンはアルグン・カンの時代に亡くなり、アルグン・カンはやはりコンギラト族出身であったトダイ・カトンにブクタクを被らせ、彼女の地位につけた。
その次に、ノカイ・ヤルグチの親族であった大ブルガン・カトンを娶った。彼女を非常に愛していたので、マルタイとデスピナより上位に置いた。アバガ・カンが死去したとき、アルグン・カンが彼女（大ブルガン・カトン）を娶った。彼女が亡くなったとき、ブルガン・カトンを彼女の地位につけた。

『集史』アバガ・カン紀（Rašīd/Али-заде 3: p. 97）

アバガの第一カトンは、史料16によれば、一代目はドルジ・カトンであった。彼女の出身部族は『集史』に記されておらず不明である。アバガは、ドルジ・カトンの死後、タタル族出身のノクダン・カトンを二代目の第一カトンとして娶り、史料17によれば、彼女から次子ガイハトゥが生まれた。史料18によれば、ガイハトゥより先に、側室のカイミシ・エゲチ（出身部族は不明）から、長子アルグンが生まれた。

（史料16）（アバガの）全ての（カトンの）長は、ドルジ・カトンであった。彼女が亡くなったとき、タタル族出身のノクダン・カトンを娶り、彼女の地位につけた。彼女が死去したとき、コンギラト族出身のタルカイ・グレゲンの姉妹であり、クトルク・テムルの娘であるイルトズミシ・カトンを娶り、彼女の地位につけた。

『集史』アバガ・カン紀（Rašīd/Али-заде 3: p. 96）

（史料17）ガイハトゥは、アバガ・カンの次子であり、タタル族のノクダン・カトンから生まれた。バクシたちが彼にイリンジン・ドルジという名前をつけた。

『集史』ガイハトゥ・カン紀（Rašīd/Али-заде 3: p. 231）

（史料18）アルグン・カンは、アバガ・カンの最年長の息子であり、カイミシ・エゲチから生まれた。　『集史』アルグン・カン紀（Rašīd/Али-заде 3: p. 196）

以上から明らかなように、アバガは名門姻族出身者のカトンも娶ってはいるが、第1代、第2代の第一カトンは名門姻族以外の部族出身者であり、名門姻族が重視されていなかったのである。これは、フレグの後継者候補であったジュムクルが、名門姻族のオイラト族クドカ・ベキ家の娘をカトンとして娶り、名門姻族と関係が深かったことと対照的である。

(3) アルグンのライバルたちの母方の血筋と姻戚関係

モンゴル帝国では、カアンが自分の息子の一人に帝位を継がせようとした場合、その後継者候補の息子に、名門姻族からカトンを娶らすことが多い。例えば、オゴデイは息子のクチュを後継者として選び、彼にはコンギラト族からカタカシュ（ボルテの兄弟の孫）を娶らした[12]。

フレグ家でも、前述のように、フレグが最初に後継者に選んだジュムクルは、オイラト族のクドカ・ベキ家から、母親クイク・カトンの姪ノルン・カトンを娶った（図2）。一方、アバガは、後継者候補でなかったため、最初は名門姻族から第一カトンを娶らなかった。それに加えて、即位以前に娶った側室カイミシ・エゲチとタタル族出身の第一カトンのノクダンからしか男子が生まれなかったという偶然も重なった。その結果、アバガの息子は二人とも、父アバガと同様、母親が名門姻族の出身ではなく、イルカン位継承には不利だったのである。

アルグンのイルカン位継承にとって彼のライバルは、叔父たち、すなわちアバガの弟たちであった。とくに、名門姻族を母親に持つ叔父たちが、最大のライバルであった。

アバガの弟は13人いたが、そのうち9人は側室からの生まれであり、イルカンの後継者として不利であった。13人のうちカトンから生まれた者は、ジュムクル、テクシン、テグデル、モンケ・テムルの4人であり、ジュムクルはすでに死去していたので、残る3人がアルグンにとって最大のライバルとなった（表1参照）。

表1　フレグの息子13人のうちカトンから生まれた息子の母親の出身部族

息子の名前	続　柄	母親の名前	母親の出身部族	備　　考
アバガ	長子	イスンジン	スルドス族	1265年即位。1282年死去。
ジュムクル	次子	クイク	オイラト族	1264年イランに向かう途中で死去。
テクシン	第四子	クトイ	コンギラト族	1268年イラン到着、1271年死去。
テグデル	第七子	クトイ	コンギラト族	1268年イラン到着、1282年即位。
モンケ・テムル	第十一子	オルジェイ	オイラト族	1265年には10歳、1282年に死去。

とくに、ジュムクルとともにイランに向かい、アバガの即位後にイランに到着した第四子テクシンと第七子テグデルは、フレグの第一カトンのクトイ・カトンの息子であり、母方でコンギラト族の血を引くという点で、最も強力なライバルであった。この二人のうち、第四子テクシンは、ジュムクルの死後、ジュムクルのカトンであるノルン（オイラト族ク

ドカ・ベキ家出身）をレヴィレート婚によって娶り、オイラト族との姻戚関係を作り、イルカン位継承にとって有利な条件を整えていた。しかし彼は、アバガ在位中の1271年に病気のために死去してしまった。一方、第七子テグデルは、次の史料19に述べられているように、コンギラト族出身のカトンを３人も娶り、コンギラト族との姻戚関係で固めていた。

（史料19）アフマド（・テグデル）は、フレグの７番目の息子であり、クトイ・カトンから生まれた。彼には多くのカトンたちと側室たちがいた。

彼のカトンたちの中の最上位は、コンギラト族出身のテクズ・カトンであった。彼女の次に、やはり、コンギラト族出身のアルマニ・カトンを娶った。彼女の次に、フセイン・アカの娘のバイテキンを娶った。彼女の次に、（コンギラト族の）ムサ・グレゲンの娘のトダク・カトンを娶った。彼女の次に、キンシュの娘であり、トガチャクの母親であるイル・クトルグを娶った。人々が、彼女を流行している妖術の嫌疑にかけたが、彼が王位についたとき、彼女を娶り、ブクタクを被らせた。最後に、トダイ・カトンも娶った。　『集史』テグデル紀（Rašīd/Али-заде 3: p. 166）

第十一子のモンケ・テムルは、母親がオイラト族クドカ・ベキ家出身のオルジェイ・カトン（クイク・カトンの妹）である。前述のように、アバガはこのオルジェイ・カトンをレヴィレート婚により自分のカトンにした。従って、モンケ・テムルが自分の息子にとってライバルであるとは考えておらず、モンケ・テムルにイルカン位を継承させ、モンケ・テムルからアルグンにイルカン位を継承させるという案も考えていたらしい[13]。しかし、モンケ・テムルは、次の史料20によれば、アバガが死去した1282年４月１日の25日後に急死してしまった。暗殺されたとする説もある[14]。

（史料20）（モンケ・テムルはイスラム暦）681年ムハッラム月16日の日曜日（1282年４月26日）に死去した。彼の生涯の期間は26年と２カ月であった。

『集史』フレグ・カン紀（Rašīd/Али-заде 3: p. 13）

その結果、アバガが長子アルグンにイルカン位を継承させる上で最大のライバルとなるのは、母方でコンギラト族の血を引き、コンギラト族との姻戚関係も築いていた弟テグデルだけになったのである。

(4) アルグンの姻戚関係の政治的意図

前述したフレグ家とテンギズ家とのギブ・アンド・テイクの通婚関係を、このようなイルカン位継承をめぐる争いという文脈に置いて考えてみると、どのような政治的意図があったと言えるであろうか。

アバガは、長子アルグンが母親の血筋では名門姻族と関係ないため、名門姻族からカトンを娶らせ姻戚関係を築くことにより、アルグンのイルカン位継承に有利な条件を作ろうとしたと考えられる。名門3姻族のコンギラト族、オイラト族、ケレイト族のうち、コンギラト族はライバルのテグデルの姻族でもあり母方の親族でもあったのでこれは除外され、オイラト族とケレイト族が姻戚関係を築くべき対象となった。

その際に、単にオイラト族からカトンを娶るのではなく、ギブ・アンド・テイクの交換のパターンにそって交換婚を継続させたことが重要である。かつてグユクの娘が嫁いだ人物であり、またその娘がフレグの側室になっていたオイラト族のテンギズ・グレゲンの家系が交換婚の相手として選ばれた。アバガは自分の娘トゥドゥゲチをテンギズに嫁がせ、そのお返しとして、テンギズとグユクの娘との間に生まれすでに成長していたと思われるクトルグを長子アルグンに娶らせた。クトルグ・カトンは、次の史料21によれば、アルグンの第一カトンとなった。

(史料21)(アルグンは)その全ての中で最も上でありテンギズ・グレゲンの娘であるクトルグ・カトンを娶った。彼女が亡くなったとき、スラミシの娘であり(クトルグの)姪のオルジタイを求めた。彼女の母親はトゥドゥゲチである。彼女はまだ子供であったので、彼と夫婦にはならなかった。

『集史』アルグン・カン紀(Rašīd/Али-заде 3: p. 196)

一方、ケレイト族からは、次の史料22によると、オン・カンの孫サリチャの娘のオルグ(フレグのドクズ・カトンの姪)をアルグンに娶らせた。ただし、この場合は、交換婚の形を取らなかった。チンギス・カン家とケレイト族との通婚関係は、一度もギブ・アンド・テイクのパターンにならず、図9のように常に一方通行であった。

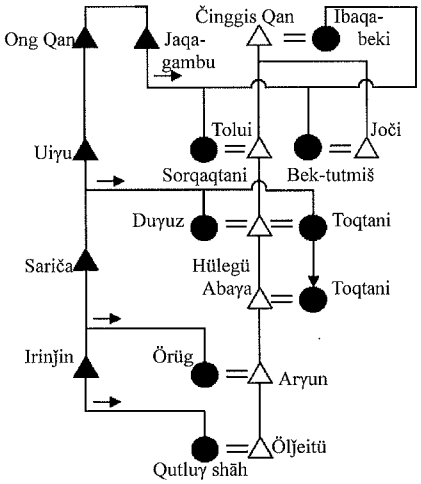

図9 チンギス・カン家とケレイト族の通婚関係

(史料22)その次に、ケレイト族のアミール・イリンジンの姉妹であり、サリチャの娘であるオルグ・カトンを娶った。サリチャはドクズ・カトンの兄弟である。彼女の死後、ルームのスルタン・ロクン・アッディーンの娘のサルジュク・カトンを娶った。

『集史』アルグン・カン紀(Rašīd/Али-заде 3: p. 196)

このように、アバガは、弟テグデルに対抗し長子アルグンにイルカン位を継承させるために、アルグンに名門姻族との姻戚関係を作り、母方の血筋がよくないという弱点をカバーしようとしたと考えられる。

しかし結局、周知のように、1282年にアバガが死去すると、結果的には、テグデルが、王族・ノヤンたちに支持され、第3代イルカンとなった。アルグンは、このテグデルから実力でイルカン位を奪い、2年後の1284年に即位するのである。

結論

フレグ家におけるアバガ、アルグン、ガザンのイルカン位の継承だけを見ると、フレグ家においてはコンギラト族、オイラト族、ケレイト族の3大名門姻族との姻戚関係が軽視され、母方の血筋は考慮されず、長子であることの方がイルカン位継承に有利に働いたかのように見える。しかし、前章までの分析から明らかなように、フレグ家においても、オイラト族、コンギラト族との間にギブ・アンド・テイクのパターンにそった交換婚が行われており、イルカン位継承において後継者候補の母方の血筋は意識されていた。名門姻族出身の母親を持つ王族はイルカン位継承に有利であり、母方の血筋が名門姻族と関係ない場合は、名門姻族から妻をめとり、姻戚関係を作ることによって、名門姻族とのつながりを作ろうとしたのである。

注

1）宇野1993、宇野1999.

2）志茂1983、志茂1995.

3）Lambton 1988, pp. 258－296.

4）宇野1993、宇野1999.

5）志茂1995、pp. 276－278.

6）モンケの即位と同時に、カラコルムおよびその周辺のトルイ家では、コンギラト族の排除が起きたと考えられる。詳しくは、宇野1993、pp. 93、96－99 参照。

7）チンギス・カン家のギブ・アンド・テイクの交換婚の中には、このように自分の側から婚出した女性以外の妻から生まれた娘が嫁ぎ返してくる場合がある。チンギス・カン家の通婚関係に見られる交換婚は、交換のパターンとしては人類学の「父方交叉イトコ婚（父の姉妹の娘との婚姻）」に類似しているが、夫と妻の系譜関係を考えてみると、このように「父方交叉イトコ婚」にはならない場合がある。つまり、アルグンからみて、妻クトルグは、父アバガの姉妹トゥドゥゲチの娘ではなく、「父の姉妹の夫の別の妻の娘」であるので、「父方交叉イトコ婚」ではないことになる。人類学の縁組み理論において、夫と妻の系譜関係によって婚姻を定義することが伝統的な方法であるが、チンギス・カン家の交換婚を定義するには充分ではなく、チンギス・カン家の交換婚の事例は、前章で述べたように、交換のパターンのみによって定義する必要がある。従って、交換される女性の母親が誰であるかは問題にならない。

8）『集史』によれば、第3代グユク・カアンの母トレゲネは、オゴデイ・カアンの第二カトンで

ある。ただし、オゴデイのカトンについては諸史料に食い違いがあり、混乱があるように思われる。

9) 志茂1995、pp. 280－286.

10) 宇野1993、pp. 423－425、427－429.

11) この部分は写本に混乱がある。Rašīd/Али-заде 3: p. 97 の校訂テキストに従えば「ムサの母はクトイ・カトンであった。彼らは従兄弟だった。」と訳すことになるが、コンギラト族に嫁いできたムサ・グレゲンの母親がカトンであるはずがなく、誤りがあると考えられる。Rašīd/Али-заде 3: p. 97 の脚注には、Rašīd/Bibliothèque National 209 に「クトイ・カトン」の前に「mādar (母)」があること、「'amzāda būdand (彼らは従兄弟だった)」の部分がないことが注記されている。該当する Rašīd/Bibliothèque National 209, fol. 296b を調べてみると、「クトイ・カトン」の前の「mādar (母)」に横線を引いて消してあり、「クトイ・カトン」の後ろに「nīz (～も)」があり、「彼らは従兄弟だった」が行の上に加筆してある。一方、Rašīd/Österreichische 326, fol. 213a は、Rašīd/Bibliothèque National 209 に近いが、「mādar (母)」に横線はなく、「nīz (～も)」があり、「彼らは従兄弟だった」は本文の行の中に入っている。これに従うならば、「ムサの母はクトイ・カトンの母でもあった。彼らは従兄弟だった。」と読むことができる。ただし、「彼らは従兄弟だった」の部分は、解釈が困難である。

12) 宇野1993、p. 76.

13) ドーソン1976、p. 174.

14) ドーソン1976、p. 119.

参考文献

ドーソン, C.／佐口透訳注、1976『モンゴル帝国史5』(東洋文庫298), 東京：平凡社 (原著：D'Ohsson, C. 1834, *Histoire des Mongols*, t.I, La Haye et Amsterdam)。

Lambton, A. K. S. 1988 *Continuity and Change in Medieval Persia*, London: I. B. Tauris.

志茂碩敏、1983「イルカン国史上におけるフラグ家姻戚の有力諸部族」『内陸アジア・西アジアの社会と文化』山川出版社。

――――、1995『モンゴル帝国研究史序説』東京大学出版会

宇野伸浩、1993「チンギス・カン家の通婚関係の変遷」『東洋史研究』52－3、pp. 69－104.

――――、1997「遊牧国家の王族の婚姻」『文明のクロスロード Museum Kyushu』58、pp. 18－24.

――――、1999「チンギス・カン家の通婚関係にみられる対称的婚姻縁組」『国立民族学博物館研究報告別冊』20、pp. 1－68.

ペルシア語史料写本略号および校訂テキスト・訳注略号一覧

Rašīd/Topkapı 1518：トプカプ・サライ博物館付属図書館 Topkapı Sarayı Müzesi, Kütüphanesi, MS. Rewān köşkü 1518.

Rašīd/Bibliothèque National 209：フランス国立図書館 Bibliothèque National, MS. Supplément persan 209.

Rašīd/Österreichische 326：オーストリア国立図書館 Österreichische Nationalbibliothek, Wien, MS.

Codex vindobonensis palatinus mxt 326.

Rašīd/Али-заде 1–1: A. A. Али-заде (ed.), *Фазлаллах Рашид ад-Дин, Джами ат-Таварих*. Том I, Часть 1, Москва, 1965.

Rašīd/Али-заде 2–1: A.A.Али-заде (ed.), *Фазлаллах Рашид ад-Дин, Джами' ат-таварих*, Том 2, Часть 1, Москва, 1980.

Rašīd/Али-заде 3: A.A.Али-заде (ed.), Арендс (tr.), *Фазлаллах Рашид ад-Дин, Джами ат-Таварих (Сборник летописей)*. Том III, Баку, 1957.

矢島洋一「『集史』日本語訳「フレグ・ハン紀」「アバカ・ハン紀」」
(http://homepage3.nifty.com/yyajima/rashid.html)

Juwaynī/Qazwīnī : *The Ta'rīkh-i-Jahān-Gushā of 'Alā'u'd-Dīn 'Aṭā Malik-i-Juwaynī*, ed. Mīrzā Muḥammad Qazwīnī, 3 vols., London-Leyden, 1912–37.

Qāšānī/Hamblī : M. Hamblī (ed.), *Tārīḫ-i Ūljāytū*, Tehran, 1348.

(UNO Nobuhiro)